



小岩四中だより  
自主 品位 明朗 友愛  
ひとすじの光

教育目標

明るく、心身ともに健やかで  
ひとりだちのできる心豊かな人間になろう

令和8年度 臨時号 4

令和8年6月11日 発行

江戸川区立小岩第四中学校長 村松 弘一

ふれあい(いじめ防止強化)月間 no.2 特大号

あえて『いじめゼロ』は目指さない  
『いじめゼロ』が持続可能な学校へ！

～礼以終始(礼を以て終始する)心が、いじめのない学校をつくる～

校長 村松 弘一



いじめは「どこか別の学校」の出来事ではなく、本校でも起こり得る重大な危機です。本校は、**生徒の安心と自信と未来への希望**を守るため、礼以終始学校(礼を以て終始する学校)として、いじめを起こさせない、そもそもいじめがない学校づくりを進めています。

礼以終始の学校は、生徒の命を守る

私がかつて訪れた、ある東京都立高校の柔道場には「礼以終始」という文字が掲げられていました。柔道には「礼に始まり、礼に終わる」という教えがあります。勝ち負けや技の巧みさよりも前に、相手や仲間、指導者、そして道場そのものに礼を尽くすことを貫くという心の在り方です。

本校は、この「礼以終始」を、生徒一人ひとりを守る学校づくりの土台に据えています。友達や先生、学校という場に対して、最初から最後まで礼を尽くす学校であることを、明確に打ち出しています。

礼が貫かれている学校では、人を物のように扱うことや、相手の痛みを無視することは許されません。逆に言えば、相手を人として認めず、存在や気持ちを軽んじてしまう状態こそが、礼が失われている、いわば失礼であり無礼な状態です。**礼を失った学校は、静かにいじめの土壌を広げます。**礼は、生徒同士が互いを人として認め合う前提をつくり、「この学校で命や心が踏みじられることはあってはならない」という共通の感覚を育てます。

礼以終始学校とは、生徒の命と尊厳を守ることを、揺るがない原則として貫く学校です。本校は、この礼を貫くことこそが、いじめを起こさせない、そもそもいじめがない学校をつくる出発点であると、はっきりと位置付けています。

礼が満ちる学校は、人を軽んじない

本校では、「礼以終始」という言葉を、日常の教育活動の中で具体的な行動に落とし込むことを大切にしています。ここでいう礼は、単なる作法やかたちではなく、目の前にいる相手を一人の人間として尊重する心です。相手の存在を認め、その人の気持ちや立場に思いを寄せ、自分の言動を律しようとする姿勢そのものが礼です。

この反対に、礼が失われている状態とは、相手を一人の人として見ず、存在や気持ちを軽んじてしまっている状態です。あいさつを返さない、目を合わせない、無視する、心ない言葉を投げつけるといった行為は、いずれ



も「そこにいる相手を認めていない」という意味で、礼を失っている、失礼であり無礼な態度です。

相手を人として認め合う関係の中で、失礼や無礼は本来、看過できないものです。あいさつを返さない、相手の話を途中でさえぎる、相手の気持ちを踏みこじる言葉を投げつけるといった行為は、どれも相手を軽んじる態度の表れです。そうした振る舞いが失礼や無礼としてきちんと意識され、「それはしてはいけないことだ」と受け止められる学校であることが大切です。**「少しくらい」と見過ごした失礼や無礼が、いじめの入口になります。**

礼が学校の隅々まで満ちているとき、「からかい」や「悪ふざけ」の名の下に人を傷つけることは、自然と許されない空気になります。目の前の相手に礼を尽くすことが当たり前になれば、無視する、笑いものにする、仲間外れにするといった行為は、その場の空気からすぐに浮き上がります。周りで見ている生徒も、「それはこの学校らしくない」「それは失礼であり無礼な行いだ」と感じるようになります。

一方で、礼が失われるとき、相手を名前ではなく呼び捨てやあだ名だけで呼ぶ、あいさつに応えない、相手の話を最後まで聞かずにさえぎるといった、小さな「人を軽んじる行為」が積み重なっていきます。そうした日常が続くと、失礼や無礼が当たり前のこととして見過ごされ、人を傷つけてもよいという空気が生まれ、いじめの芽が育つ土壌になります。

だからこそ本校では、日々のあいさつやことば遣い、授業や学級活動でのやり取り、部活動や清掃の場面など、学校生活のあらゆる場面で、礼を意識した指導を続けています。礼が満ちる学校は、人を軽んじない学校です。本校は、この当たり前の原則を徹底することが、いじめを起こさせない、そもそもいじめがない学校文化をつくるうえで欠かせないと捉えています。

## 礼を交わし合う日常が、「いじめを許さない空気」をつくる

本校では今年度から、全校朝礼の礼の仕方を変えました。号令とともに全員が一斉に頭を下げるのではなく、まず私が生徒に向かって礼をし、その姿を見て、生徒が礼を返す形にしています。私は、目の前にいる生徒一人ひとりを、確かにそこにいる存在として認め、その人の人生と日々の努力に敬意を払う気持ちを込めて、礼をしています。

この「先に礼をする」という姿勢は、立場の上下ではなく、人としての対等さを大切にするという、学校からの明確なメッセージです。生徒の側もまた、校長や教職員、仲間に向かって自ら礼を返すことで、「ここにいる相手を大事にする」という意思を、ことばと態度で示しています。廊下や昇降口、授業の前後、部活動の行き帰りなど、学校のあらゆる場面で交わされる「おはようございます」「ありがとうございます」の一つひとつが、相手を一人の人として認める礼の関係を積み重ねています。

こうした礼のやり取りが日常になった学校では、無視する、笑いものにする、仲間外れにするといった行為は、すぐに場の空気から浮き上がります。「そんなことはこの学校ではしない」「人を軽んじることは、この学校らしさに反する」という感覚が、生徒と教職員の間で自然に共有されていきます。

生徒一人ひとりに向ける礼が当たり前になったとき、その学校には「いじめを許さない空気」が生まれます。

### 礼を交わし合う日常が、いじめを寄せつけない見えないバリアになります。

本校は、この礼を通してつくられる空気こそが、いじめを起こさせない、そもそもいじめがない学校文化の核であると、はっきりと捉えています。

## 「本校には関係ない」が最大の弱点になる

いじめの報道に触れたとき、「かわいそうだ」「ひどいことだ」と感じると同時に、「うちの子には関係ない」「本校の生徒に限って、そんなことはしない」と考えてしまうことがあります。しかし、その感覚こそが、いじめを見逃し、対応を遅らせる最大の弱点になります。

本校も例外ではありません。現在、本校におけるいじめの認知件数がゼロであったとしても、それは「本校にはいじめが存在しない」という安心の根拠にはなりません。「**本校には関係ない**」という一言が、いじめを見逃す最大の落とし穴です。

いじめは、表面化した時点では、すでに長い時間をかけて積み重なった結果であることが多くあります。何気ない一言、からかいのつもりの言動、仲間内での悪ふざけが重なり、目に見えないところで、特定の生徒の心と生活を追い詰めていきます。そのサインは、授業中の表情や休み時間の過ごし方、SNS上でのやり取りなど、日常のあちこちに現れます。

本校は、「本校には関係ない」と考えるのではなく、「本校でも起こり得る重大な危機」として、いじめを直視します。そのうえで、小さな違和感や不安のサインを見逃さず、担任、学年、生活指導部、管理職が情報を共有し、組織としていち早く動くことを大切にしています。

## いじめは、生徒の未来を奪う「人生の大事件」だ

いじめは、一時的なトラブルではありません。一人の生徒から**安心と自信と未来への希望**を奪い、その後の人生の流れを変えてしまう「人生の大事件」です。**いじめは、子どもから明日を安心して待てる心を奪います。**

いじめを受けた生徒は、自分の存在そのものを否定されたように感じ、「自分はここにいてよいのか」「自分には価値がないのではないか」という思いにおびやかされます。教室や廊下、部活動など、本来安心して過ごせるはずの場所が、恐怖や不安の場になってしまう。「また何かされるのではないか」「今度はどんなことを言われるのか」と、毎朝学校に向かう足が重くなり、心身の不調となって表れることもあります。

その影響は、その時期だけにとどまりません。不登校や転校、学力の低下、進路の選択の狭まりなど、将来にまで長く影を落とします。大人になってからも、人間関係への不安や自己否定感として残り続けることがあり、本人の人生に深い爪痕を残します。

いじめは、一人の生徒の人生にとって、決して「よくあること」や「誰にでもある経験」などと軽く扱えるものではありません。本校は、いじめを「生徒の未来を奪いかねない人生の大事件」として捉え、その芽を決して見過ごさないことを、学校の責務と考えています。

## いじめは、加害生徒と大人社会も深く傷つける

いじめは、被害を受けた生徒だけでなく、加害に関わった生徒やその保護者、学校、地域社会にも深い傷を残します。加害に関わった生徒は、自分が行った行為の重大さに後から気付かされ、「あのとき、なぜ止めなかったのか」「なぜあの言葉を言ってしまったのか」と自責の念を抱え続けることもあります。

保護者は、自分の子どもが加害に関わったことを知ったとき、驚きとともに深いショックを受けます。我が子の行為を受け止めながら、被害を受けた生徒とその保護者への申し訳なさや、地域や学校への信頼の揺らぎなど、複雑な思いを抱えることになります。

学校や教職員も同様です。いじめが発覚したとき、「なぜ気付かなかったのか」「なぜ止められなかったのか」という自問自答に向き合うことになります。学校と教職員が積み上げてきた信頼を、一気に失わせるおそれがあるということです。**一つのいじめ事案が、一つの学校の信頼を根元から揺さぶります。**

いじめは、決して「子ども同士の問題」ではありません。子どもたちを取り巻く大人社会全体の問題であり、その対応の在り方が、学校や地域の信頼に直結します。本校は、このような重さを踏まえ、「起こってから対応する」のではなく、「そもそも起こさせない」ことを前提とした学校経営が不可欠であると考えています。



## 「起こってから」ではなく「起こさせない」を、学校経営の大原則にする

本校はいじめを、一人の生徒から安心と自信と未来への希望を奪い、人生の流れを変えてしまう「人生の重大事件」であり、本校でも起こり得る重大な危機として直視しています。そのうえで、起こってしまったいじめにどう対応するかだけを考える学校経営では、生徒の命と尊厳を守り切ることができないと捉えています。いじめへの対応を、起こってからの事後処理にとどめる学校経営は、もはや許されないと強く断言します。**いじめ対応を事後処理で終わらせる学校経営は、本校の選択肢にはありません。**

本校は、「そもそもいじめを起こさせない、いじめがない学校であり続けること」を、達成目標ではなく、学校経営の大原則として位置付けています。これは、「できればそうになりたい」という願望ではありません。いじめはどこにでも起こり得るという現実を踏まえたうえで、「だからこそ本校では起こさせない」と決めて運営している学校です。生徒一人ひとりの**安心と自信と未来への希望**を守り抜くことを、学校経営の出発点に据えています。

その具体化として、本校では、生徒が主役となる学校づくりと、いじめの未然防止に力点を置いた攻めの生活指導を、車の両輪として進めています。生徒会が自らの言葉でまとめた「いじめ撲滅宣言」や、日常の学校生活を振り返って課題を見出す取組は、生徒が自分たちの学校を自分たちの手で、より良くしようとする動きです。教職員は、生徒ファーストの視点に立ち、こうした主体的な動きを後ろから支えながら、日常のあいさつや授業、学級活動、生徒会活動など、あらゆる場面で「いじめを許さない」メッセージを繰り返し発信しています。

本校における攻めの生活指導とは、問題が起こってから動く指導ではありません。日々の小さな違和感や不安のサインを見逃さず、学年や生活指導部、管理職と情報を共有し、組織として早期に手を打つ指導です。いじめの芽を「仕方がないこと」として放置せず、「本校の生徒を守るために、今できる最善を尽くす」というスタンスで、一つひとつのケースに向き合う指導です。「起こってからでは遅い」という危機感を、教職員全員の共通認識として持ち続けることこそが、「起こさせない」を学校経営の中心に据えるということだと考えています。

## 礼以終始学校として、いじめゼロを前提にする

本校はいじめを、「どの学校にも、どの生徒にも起こり得る深刻な危機」として正面から捉えています。そのうえで、起こってから対応するのではなく、そもそも起こさせない、いじめがない学校であり続けることを、学校としての揺るがない方針としています。この方針を支える土台が、「礼以終始」という考え方です。

生徒が友達や先生、学校という場に対して礼を尽くすこと。教職員が、生徒一人ひとりに向けて礼を尽くすこと。学校と家庭と地域が、子どもたちの前で互いを尊重し合う姿を示すこと。こうした日常の礼の積み重ねが、「人を軽んじることを許さない学校文化」をつくります。その文化があるからこそ、「いじめはこの学校にはふさわしくない」「いじめは絶対に許さない」という空気が生まれます。

保護者・地域の皆様には、日々の生活の中で、お子さんの礼やあいさつの姿に目を向けていただき、良いところを認めて言葉にしていただければ幸いです。家庭の中で交わされる「ありがとう」「ごめんなさい」という一言一言が、お子さんの礼の心を育て、学校での人間関係にも大きな力を与えます。お子さんの様子で気になることや心配なことがありましたら、小さなことでも遠慮なく学校にお知らせください。早い段階でつながっていただくことが、いじめを起こさせないこと、起きてからも早期に発見して対応することにつながります。

本校は、礼以終始学校として、生徒一人ひとりの命と尊厳とともに、安心と自信と未来への希望を、自らの責任で守ります。**本校はいじめを「ゼロを目指す」のではなく、「ゼロを前提とします」。**

礼以終始学校として、本校は、生徒の命と尊厳を守ることを揺るがない原則とします。いじめを起こさせない、そもそもいじめがない学校であり続けることを、本校の責任で必ず実現していきます。